



一般社団法人

JSHA 日本人間学会 会報

Japan Society Of Humanistic Anthropology Association

日本学術会議 協力学術研究団体

No. 30 2025年秋号

〒180-0022 東京都武蔵野市境 5-4-3-405 ☎ 03 (6820) 2417
HP : <http://www.ningengakkai.or.jp> E-mail: office.ningengakkai@gmail.com

学会創設 40 周年記念号



日本人間学会 創設 40 周年を迎えるにあたって

代表理事 瀧 順一郎

本年、日本人間学会は創設 40 周年という節目を迎えました。この重要な節目に、これまでの歩みを振り返り、現代社会において人間学が果たすべき使命について考察します。



創設の背景と理念

1985 年、日本は戦後 40 年を経て高度経済成長を遂げ、物質的豊かさを享受する時代を迎えていました。電化製品や自動車の普及により生活は便利になり、国際的地位も向上していました。男女雇用機会均等法の施行により、女性の社会進出も進展しつつありました。

本学会の創設者・高島博医師は、こうした物質文明の進歩の陰で、研究が専門化し「人間」不在の状況に陥っていることを憂慮されました。専門諸科学のみでは説明し尽くせない「精神」を含めた人間存在の全体性を、学際的に探究する場として本学会は設立されました。

元代表理事・今村和男先生は「人間の心の在り方」が多くの問題の根底にあると考え、哲学的人間学の重要性を説かれました。

会報 2025年 秋号

- ◆ 代表理事 挨拶 代表理事 瀧 順一郎
- ◆ 祝 辞・理事 勝本義道
・研究会員 ケシャブ・プラサド・チャウラガイン
- ◆ 学会沿革紹介
- ◆ 「日本人間学会四〇周年記念号」発刊に寄せて
研究会員 関根 均
- ◆ 今後の学会の未来を考える 事務局 高橋 晋
- ◆ 【第 2 回】哲学と、もう一度出会う
- ◆ 事務局からのお知らせ／編集後記

前代表理事・勝本義道先生は、日本の情操的精神文化が人間の本质解明に不可欠であるとし、その成果を『情然の哲学』として著されました。『情然の哲学』とは、存在の根源を物質や無機能的エネルギーではなく、情的な「情然のゆらぎ」の場と捉え、すべての存在が関係性によって成り立つとする思想です。

時代の変化と課題

創設から 40 年、世界は劇的な変化を遂げました。1990 年代初頭のインターネット普及、2007 年のスマートフォン登場、そして近年の AI 技術の発展は、私たちの生活様式を根底から変えました。バイオテクノロジー分野ではヒトゲノム解析が進み、遺伝子編集技術が医療や農業に应用されるようになりました。

2020 年の新型コロナウイルス・パンデミックは、医学的課題にとどまらず、経済・社会構造に大きな変革をもたらしました。リモートワークやオンライン教育の拡大は、働き方や学び方を根本的に変え、社会における人間の存在や役割について再考を促す契機となりました。

こうした変化の中で、「人間とは何か」「人間らしさとは何か」という根源的な問いは、むしろその重要性を増しています。

EXPO2025 が示した人間性の本質

2025 年、「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマに開催

された EXPO2025 大阪・関西万博は、現代における人間性の本質を考える上で示唆に富む場となりました。

特筆すべき出来事が 8 月 13 日に発生しました。大阪メトロ中央線の送電線トラブルにより、会場への唯一のアクセス手段が停止。熱帯夜の中、会場外には約 4 万人が長時間の待機を余儀なくされ、熱中症患者も出る事態となりました。

しかし、この非常事態において人々が示した行動は印象的でした。暴動やパニックが起こることなく、互いに協力し合い、高齢者や子どもをいたわり、海外パビリオンのスタッフとも一体となって困難な時間を過ごしました。海外からの来場者たちは、この日本人の対応に驚嘆の声を上げたと報じられています。運転再開は翌日 14 日午前 5 時半。まさに戦後 80 年を迎える前夜の「オールナイト万博」は、危機的状況下における人間の協調性と思いやりの精神を象徴する出来事でした。

8 月 22 日の「国連スペシャルデー」で、アントニオ・グテレス国連事務総長は、安全保障理事会の改革の必要性を述べられたうえで「人類は団結したとき最も強くなります。未来を描くことは政府だけの仕事ではなく、私たち全員の共有の責任です」と強調されました。

EXPO2025 のテーマソング「この地球(ほし)の続きを」には、こうした願いが込められています。

100 年前に 笑われてた 誰かの夢が 今を動かしてる
瞳の色も言葉も違う だけど 同じ願いを持っているはず
こんにちは 海を越え この命は 響き合う
輝きながら この地球(ほし)は この命は 続く

万博は、国境を越え、伝統と文化を通して心と心が触れ合い、100 年後の地球のために私たち一人ひとりが何をできるかを考える場となりました。

歴史的転換点における人間学の意義

2025 年は、日本にとって歴史的な転換点となる年でもありました。

10 月、日本初の女性首相が誕生しました。1925 年の普通選挙法公布から 100 年、1945 年の女性参政権付与から 80 年を経た、日本の民主主義の新たな段階への移行を象徴する出来事です。

一連の外交場面では、各国首脳との直接的な対話と信頼関係の構築が重視されました。国と国との関係においても、制度や条約の前に、人と人との心の交流、相互理解が基盤となることが改めて示されました。

戦後 80 年を迎えた今、当学会が推進してきた、過去の歴史を互いに許し合う和解の精神に基づいた心の交流が、国際社会においても求められています。

AI と人間の共存

EXPO2025 では、AI と人間の共存という未来が具体的に示されました。

筑波大学の落合陽一准教授は、デジタルヒューマンに自分のすべてのデータを記録し、第二の自分と対話できる未来を提示しています。大阪大学の石黒浩教授は、AI に記憶を託したアンドロイドとして生き続ける未来を描いています。

AI は大量のデータを分析し、コンテンツやテキスト、画像を生成する能力を持ちますが、従来「人間らしさ」と考えられてきた共感や倫理的判断、責任を持った行動といった領域については、なお課題が残されています。

今後の技術進歩により、こうした課題への改善が期待されますが、同時に、「人間であることの本質的な意味」を問い、AI との比較の中で、人間固有の心的領域である「精神」を探求していくことが求められています。

情然の哲学と家庭論の構築

現代社会では、家族やコミュニティの在り方も大きく変化しています。

夫婦の姓に関する議論や、多様な家族形態の出現は、「家庭」や「家族」の意義や価値について改めて考える契機となっています。

『情然の哲学』によれば、すべての存在は絶対的な「個」や「点」では成立せず、関係性によって成り立ちます。存在の根本的な原型は、時間軸（因果 / 親子）と空間軸（陰陽 / 男女）による「家族的四位構造」であり、この構造は一個の素粒子から人間、家族、宇宙全体に至るまで展開する普遍的なものとされています。

この存在の根源とその構造に基づき、愛とは何か、人間が男と女として存在する意味とは何か、結婚や家庭を作る意義とは何かを改めて問い直した、新しい「家庭論」を構築することが、重要な課題の一つと考えています。

新たな時代に向けて

日本人間学会は創設 40 周年を迎え、新たな人間学を展開していきます。

AI 技術の進展、国際情勢の変化、家庭やコミュニティの価値の再評価——これらすべてが、「人間とは何か」という根源的な問いへと導きます。

専門諸科学が高度に発展した現代においてこそ、学際的アプローチを通じて人間存在の全体性を探求する人間学の意義は増しています。心と心のつながり、関係性の中で生きる人間の本質、そして未来世代に引き継ぐべき精神文化——これらのテーマに真摯に向き合い、より良い社会を築くための知恵を共有し続けること。100 年後の地球を想像し、この命の輝きを次世代へとつないでいくために、人間学の探求をより深めてまいります。

日本人間学会創設 40 周年 祝辞

理事 勝本義道

(平成 25-26 元代表理事)



この度、日本人間学会が創設 40 周年という輝かしい節目を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。本学会の発展にご尽力されてこられた諸先輩方、そして現在会員として活動されている皆様に、元代表理事として深く敬意を表します。

▶代表理事時代の活動と「和解」の理念

私が平成 25 年（2013 年）から 26 年（2014 年）にかけて代表理事を務めさせていただいた時期、そしてそれに先立ち平成 22 年（2010 年）から専務理事として学会運営に深く関わらせていただいた日々が、昨日のここのように思い出されます。当時は、学会の社会貢献活動の一環として、国家間の「和解」をテーマとした国際的な取り組みに情熱を注いでおりました。

特に印象深いのは、ベナン共和国との交流です。2010 年 11 月、私たちは日本在外ベナン人高等理事会との共催で「ベナン共和国独立 50 周年・国民会議／民主化 20 周年記念祝賀会」を東京で開催いたしました。この祝賀会で私は開会の挨拶を述べさせていただき、21 世紀初頭の世界が楽観できる状況ではなく、人類が未だ経験したことのない地球規模の危機と不安に直面している中で、真の愛と叡智を結集する必要性を訴えました。

ベナン共和国が国民会議を通じて国内の分裂状態に終止符を打ち、対話による平和的な民主化を成し遂げた「和解の精神」は、世界が学ぶべき素晴らしい模範でした。私たちは、この「ベナン精神」を広く世界に伝え、人類の平和と発展に貢献することを目指したのです。この活動は、ハイチ共和国をはじめとする国々からも関心を寄せられました。

また、この「和解」の理念を携え、2010 年 9 月にはネパールを訪問いたしました。当時、国内の対立に苦しんでいたネパールにおいて、大統領や首相をはじめとする国の指導者の方々と会談し、ベナンの経験を分かち合いながら、「和解と発展」の思想について対話を重ねる機会を得ました。人間の本質は「心」にあり、ネパールは和解による平和を実現できる国であると訴えたのです。これらの活動は、当学会が「人間とは何か」という根源的な問いを探究するだけでなく、その成果を社会に還元し、具体的な平和貢献を目指すという設立趣旨を体現するものであったと自負しております。

しかし、その後、様々な事情からこうした国際的な和解運動は継続が叶わぬ状況となってまいりました。

▶深刻化する国際情勢と国内課題

私が代表理事を務めていた当時と現在とを比較すると、国際情勢はさらに複雑化し、深刻さを増しています。ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルとパレスチナを巡る中東問題、そして中国、韓国、北朝鮮など、日本を取り巻く国際環境も予断を許さない状況が続いております。日々、様々な情報に触れるにつけ、私はこの国の未来に対する強い憂いを禁じ得ません。

このような国際情勢の変化は、当然ながら我が国の内政にも深刻な影響を及ぼしております。国内に目を向ければ、少子高齢化の波は予想をはるかに超える速さで進行し、国力の衰退が深刻に懸念されています。産業界からは人材不足の深刻な声が上がっており、その対策として外国人の受け入れ拡大が議論されています。しかし、異なる文化や価値観を持つ人々を大規模に受け入れる移民政策は、一度導入すれば後戻りが難しい極めて慎重を要する課題です。既に欧米諸国の例を見ても、移民政策で成功している国はなく、むしろ過度な受け入れが引き起こした様々な問題が露出し、政策を大きく転換する国も見られます。私たちは、そうした先例に真摯に学び、日本としてどう対処すべきか、熟慮を重ねる必要があります。

▶守るべき日本の精神文化

北海道をはじめとする日本の土地が外国資本によって取得されているという事実も憂慮すべきですが、私が土地問題以上に懸念するのは、日本が長きにわたり培ってきた、他国に類のない精神文化、すなわち「人」そのものの未来です。そして、『この国の未来を担う青年層に対して、私たちは日本の精神文化をいかにして守り、後代へとつないでいくのか。』この問いこそ、現代日本が直面する最も重要な課題であると痛感いたします。

情然の哲学

勝本義道 著



- 序 章 存在の理由
- 第 1 章 自分とは何か
- 第 2 章 原初のゆらぎ
- 第 3 章 存在の構造
- 第 4 章 愛と自由と生命と理想
- 第 5 章 概念から物質そして人間へ
- 第 6 章 人生の目的
- 第 7 章 世界平和に向けて
- 第 8 章 日本の使命と役割
- 終 章 これからの百年・千年紀に向けて
- ※書籍代（送料込）2500 円

購入ご希望の方は事務局まで E メールでお問い合わせ下さい。

一般社団法人 日本人間学会事務局

E-mail: office.ningengakkai@gmail.com

▶学会の新たな使命——青年層への働きかけ

このような時代背景を踏まえ、創設 40 周年を迎えた日本人間学会が果たすべき役割について、一つの提案をさせていただきたく存じます。今後社会貢献を具体的に展開していくとするならば、まさしくこの国の青年層に向けた精神文化的なアプローチを、具体的な施策として果敢に進めていくべきであると、私は強く提案いたします。

かつてとは異なり、現代の青年たちは SNS を通じて情報を得、コミュニケーションをとることが当然となっています。これまでやや閉鎖的であったかもしれない学会も、今後はこうした時代の利器を最大限に活用し、広報にも努めるべきです。そして、私たちは彼らに何を問いかけていくべきか。それは、本学会が創設以来探究し続けてきた根源的なテーマ、すなわち「人間とは何か」「人間が持つ価値とは何か」という問いに他なりません。さらに、現代的な課題意識から「国家と人」という観点から見た人間観を加え、青年層への啓蒙活動を展開していくべきでしょう。`日本の伝統、精神、文化といった、国家を形成する上で不可欠なものをいかに継承していくか`この国の性格を決定づける「人」を育むことこそ、喫緊の課題なのです。

▶学際的研究と新時代への展望

私が著書『情然の哲学』で探究したように、哲学、宗教、科学といった諸分野が、それぞれの壁を越えて「存在の根源」という共通のテーマに向き合う時代が到来しています。学際的研究を推進するという本学会の設立理念は、まさに現代においてその真価を発揮する時を迎えているのです。SNS という新しいインフラを活用し、青年たちが「自分とは何か」、「人生の目的とは何か」、「愛とは何か」、「世界平和のために何ができるか」といった問いに真摯に向き合えるような知的空間を提供していくこと。それこそが、創設 40 周年を迎えた日本人間学会に課せられた、新たな時代の使命ではないでしょうか。

この記念すべき年が、日本人間学会のさらなる発展と、日本の未来を担う青年たちへの新たな貢献に向けた出発点となることを心より祈念し、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

勝本 義道（かつもと よしみち） 理事
1956 年 岡山県生まれ 大阪芸術大学卒
当学会元代表理事（2013 年～ 2015 年）



今年、日本人間学会が創立 40 周年を迎えられることを大変嬉しく思います。

日本人間学会（JSHA）は 1985 年 10 月 25 日の創立以来、ネパールにおける和解運動を支援し、2010 年と 2011 年にはネパールを訪問しました。以来、JSHA と連携し、ネパールにおける和解活動を推進してきました。

私はネパール語で『スワラージャとメルミラップ（自治と和解）』を出版し、様々な地方自治体に働きかけてきました。そして、地方自治体が地域内で抱える小さな問題を解決できるよう支援する「司法委員会と地方自治体」を組織しました。

世界中で様々な紛争が勃発する中、私たちは世界規模で和解を推進し、定着させていく必要があります。JSHA とネパールが、再び和解のための共同の取り組みを始めることを願っています。

私は改めて、JSHA とそのチームの創立 40 周年を祝福します。

I am really happy to know that you are celebrating the 40th anniversary of the Japan Society of Humanistic Anthropology Association this year. Journey from 25th October, 1985 to till date, JASHA has been encouraging Reconciliation Movements in Nepal, for which they even visited Nepal on the year 2010 and 2011. Since then, in relation to JASHA, we have continued promoting Reconciliation programs in Nepal. I have published "Swarajya and Melmilap" (Self-Rule and Reconciliation) in Nepali and have approached various local governments. Collaborating with them, we have organized "Judiciary Committee and Local Government", which can help local governments locally resolve small issues occurring within their area. As various conflicts have arisen across the world, we have to advocate and establish Reconciliation globally. I hope JASHA and Nepal will again start joint initiatives for Reconciliation.

I again congratulate JSHA and its team on its 40th anniversary celebration.

Keshab Prasad Chaulagain
ケシャブ・プラサド・チャウラガイン
JSHA 研究会員（2011 年）
ネパール諸宗教評議会事務総長



学 会 沿 革

- 1985 年（昭和 60）10 月 25 日 創設
高島博博士 初代理事長に就任
- 1987 年（昭和 62）8 月「日本学術会議」第 1 部・哲学分野
に登録
- 1988 年（昭和 63）9 月 第 1 回総会
——以後、総会、総合部会、専門部会を毎年 6 回開催
- 1995 年（平成 7）9 月 今村和男氏 代表理事就任
1996 年（平成 8）より地方支部活動開始
（新潟県小地谷市にてシンポジウム 1 ～ 5 回）
- 2007 年（平成 19）6 月 学会活動再開
神山五郎氏 代表理事就任
- 2009 年（平成 21）8 月 ベナン共和国 和解運動の研究開始
2010 年（平成 22）4 月 社団法人化
今村和男氏 代表理事就任
「月例研究会」定期開催 開始
8 月 命を大切にする運動の支援開始
9 月 ネパール訪問（ベナン共和国和解
運動の紹介）
- 2011 年（平成 23）2 月 国連訪問（ベナン、ハイチ、ネパール
国連大使と面会）
- 2012 年（平成 24）1 月 「人間学入門講座」定期開催の開始
11 月 東京にてネパール宗教指導者と
「和解と平和」のための会議開催
12 月 「平和哲学」セミナー開催
- 2013 年（平成 25）1 月 「ネパール指導者のための JSHA
セミナー」開催
6 月 勝本義道氏 代表理事就任
9 月 ネパール訪問（「平和哲学」の紹介）
11 月 東京にて「平和哲学」セミナー開催
- 2014 年（平成 26）1 月 大阪にて「平和哲学」セミナー開催
2015 年（平成 27）4 月 瀧 順一郎氏 代表理事就任
- 2021 年（令和 3）2 月 月例会議 再開
- 2025 年（令和 7）10 月 学会創設 40 周年

歴代 代表理事

1985



1995

2 代 今村 和男（1995 年～ 2007 年）



2000

3 代 神山 五郎（2007 年～ 2010 年）



2010

4 代 今村 和男（2010 年～ 2013 年）



5 代 勝本 義道（2013 年～ 2015 年）



6 代 瀧 順一郎（2015 年～



2025

祝 辞

「日本人間学会四〇周年記念号」発刊に寄せて

このたびは、日本人間学会創立 40 周年記念号のご発行、誠に
おめでとうございます。心より深くお慶び申し上げます。

わたくしは、研究会員の関根均と申します。2010 年より、か
れこれ 15 年ほど当会にお世話になり、人間学の研究に従事して
参りました。わたくしが「人間学の現在」などの論考を発表する
ことができたのも、ひとえに当会の自由な学風があってこそこの
ことであり、改めて代表理事をはじめスタッフの方々に深甚なる御
礼を申し上げます。

さて、貴学会が 40 年の長きにわたる歴史を無事に迎えられま
したことは、高島博先生から今村和男先生へと脈々と続いてきた、
尊い伝統の賜物と拝察いたします。

特に、わたくしが入会した当時、代表理事でいらっしゃいまし
た今村和男先生について、一言お話しさせてください。先生は当
時すでに 90 歳というご高齢でありながら、毎月の研究会に休む
ことなく参加されていたいらっしゃいました。その高潔なお人柄と、
衰えを知らない向学心は驚くべきものであり、若輩のわたくしは
何度も感銘を受けたものです。

先生の立ち居振る舞いは非常に紳士的で、「イギリスの紳士に勝
るとも劣らぬ日本の紳士がここにいる」と、そのような感慨を抱
いたことが幾度もありました。わたくしが研究発表をする時など
も、先生はわたしの隣の席で静かに聴講され、熱心にノートまで

とられていた姿は、今も鮮明に心に残っております。わたくし
が長くこの学会にお世話になっているのも、やはり、今村先生
のあのようなお人柄によるところが大きかったと確信しており
ます。

今、わたしたちは、高島先生、今村先生から引き継がれた伝
統を礎とし、新しい時代の新しい人間学の構築へと進む途上に
ございます。すでに 40 年の歴史を持つ学会というのは、それ
自体が非常に貴重なものであり、当会はこれからさらに大きく
発展していくものと存じます。

わたくしも研究会員の一人として、この輝かしい記念すべき
節目に、心新たに人間学の研究に取り組む所存でございます。

日本人間学会の今後ますますのご発展と、会員各位のご健勝
を心よりお祈り申し上げます。略儀ながら、紙上をもって創立
40 周年の祝辞とさせていただきます。



関根 均（せきね ひとし）

研究会員

1960 年生まれ

慶応大学文学部卒業 国文学専攻

2010 年日本人間学会に入会

AI 時代の学会再定義

今後の学会の未来を考える

事務局 高橋 晋

はじめに：40 年の歩みと、問いの継承

日本人間学会が創設されてから、この節目となる 40 年の歳月
が経ちました。創設者・高島博先生の「人間とは何か」という普
遍的な問いに対する熱い哲学的な問題意識は、今も私たちの原点
です。

この 40 年の蓄積を踏まえ、今、運営事務局は、「学会の存在
意義と進むべき方向」について、時間をかけて役員たちとの討議
を重ねてまいりました。また AI との対話を繰り返し、そこから
得た率直な考察と、未来への覚悟をこの紙面を拝借して表明し
たいと思います。

1. 創設の理想と、外から見た現実

理想：知の共同体として

創設時の理念は、哲学、心理学、宗教、科学といった学際領
域を横断し、「人間とは何か」という問いを共有する知の共同体
を築くことでした。効率や成果が重んじられる現代社会におい
て、「人間とは何か」「生きるとは何か」といった根源的な問い
を持ち続けることこそ、当学会の存在理由であると確信してい
ます。

現実：閉鎖性という壁

しかし同時に、私たちは率直に認めなければならない現実が
あります。

・外から見た学会：

一般の人々から見て、学会は「閉鎖的な専門家集団」
「難解な用語で話す集まり」と映ることが多く、
「自分たちには関係のない世界」という印象を与えがち。

・運営上の課題：

会員数の減少、高齢化、そして活動の停滞という、多くの学術団体が直面する課題が、当学会にもある。率直に言って、このままでは会の維持そのものが、目的化しかねない危機的状況。

こうしたイメージを払拭し、人類の根源的な課題に開かれた環境を創造していくことこそ、私たち運営側の喫緊の責任であると考えます。

2. AI 全盛時代への応答：問いの価値の復権

生成 AI が急速に社会に浸透する今、人間学が果たすべき役割は、かつてないほど緊急性を増していると感じています。

AI の進化は、5 年後となる 2030 年までに人間の知的領域に本格的に入り込むことでしょう。かつて「人間にしかできない」とされてきた創造的な営みが、既に AI によって実行可能になっています。

この目覚ましい状況は、同時に「人間とは何か」という問いを、かつてないほど切実なものにしました。

- ・AI の限界:現時点において AI は人間の「知」を再現できても、「意味」や「良心」「感情」といった領域には届きません。
- ・人間の使命:だからこそ私たちは、「では、人間にしかできないこととは何か」——いわゆる人間らしさを、改めて明確にしなければならないのです。

私たちは、AI によって「答え」が瞬時に得られる時代だからこそ、「何を問うべきか」という「問いの価値」が爆発的に上昇していることを痛感しています。AI は最適解を出せても、「問い」を自ら見出すことはできません。問いを持ち続けるからこそ、AI 時代に人間が人間らしく生きる方法だと思ふのです。

3. 未来への展望：開かれた「人間性の羅針盤」へ

では、今後の日本人間学会をどのように運営していくべきでしょうか。

私たちは、40 周年を「再構築の機会」として捉え、閉じた研究団体から、社会と共に歩む「生きた学会」への転換を決意します。

- ・目標：開かれたプラットフォームへ
- 学際性から実践へ：従来の専門知識の蓄積に加え、AI 倫理、医療、教育、福祉など、多様な領域と協働し、「人間学の実践モデル」を社会に示していきます。
- 若い世代との対話：従来の論文誌だけでなく、オンライン講座、動画配信、対話型ワークショップといった多様な媒体を

通じて、知の共有を開かれたものにします。特に AI 時代を生きる若い世代こそ、人間学的な思考を必要としています。

- 問いの共有：私たちは「答え」を教えるのではなく、社会と「問い」を共有する新たな試みに挑戦します。学生や一般市民が参加できる場を設け、共に問い、共に考える——そうした積極的な姿勢こそが、これからの時代には不可欠です。

新たな次元での尊厳の構築

AI 時代においても、人間は「意味を問う存在」であり続けることでしょう。いや、むしろ AI 時代だからこそ、人間学の重要性は増えています。

私たちの学会は、四十年の歴史の上に、この大きな転換点に立っています。この転換を、人的リソースが少数だからこそできる、深く、開かれた、社会とともに歩む学会へと生まれ変わる機会と捉えました。

会員の皆様、そしてこれから人間学に関心を持たれる皆様へ。共に問い、共に考え、共に前に進んでいきましょう。「人間とは何か」その問いの先に、私たちの中に眠る潜在的な力、価値を呼び覚まし、新たな次元での尊厳を構築できると信じています。

想いをかたちへ転化するプロセスを運営事務局が積極果敢に推進していけばいくほど、世の中に静かな、しかし確かなうねりをつくる、その震源地となる。それがこの学会の存在意義である、そう確信してやみません。



高橋 晋（たかはし すすむ）

1963 年 東京生まれ
2010 年入会
2018 年より事務局従事



哲学と、もう一度出会う

——人生の節目に「問い」をたずねて

編集部「ソフィアの友」連載／文責：関根

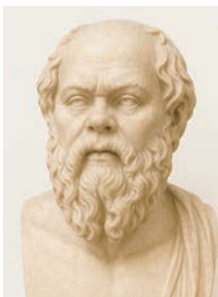
第2回 ソクラテス

——自分を知るという革命

"世界" から "わたし" へ：哲学の転回点

「自分のことは、自分が一番よくわかっている」
——私たちはつい、そんなふうに思いがちです。けれども、そう言い切れるだけの「自分」とは、一体何でしょうか？

今回取り上げるソクラテス（前 470 頃～前 399）は、古代ギリシア哲学の流れにおいて、ある意味 "革命的な転換" をもたらした人物です。それまでの自然哲学者たち（タレス、アナクシメネス、ヘラクレイトスなど）は、主に「宇宙は何からできているか」「自然はどう動いているのか」といった〈外の世界＝自然〉に関心を向けていました。



しかしソクラテスはそのベクトルを真逆に向けました——「私は、どう生きるべきか？」

つまり〈内なる自己＝魂〉に向かって、深い問いを発したのです。この転回は、哲学の根本的方向性を変えただけでなく、今日に至るまで人間の思索と倫理に大きな影響を及ぼしてきました。

アテナイの崩壊と価値観の動揺

では、なぜソクラテスは "内面" に目を向けるようになったのでしょうか？

その背景には、アテナイ社会全体の激動と混乱がありました。ソクラテスの活動期、アテナイはペロポネソス戦争（前 431～前 404 年）という大戦争の渦中にありました。これはスパルタとの長期戦で、敗北によってアテナイは経済・軍事・政治すべてにおいて疲弊し、市民の間には深い虚無と不信が広がっていたのです。

この敗戦は、伝統的価値観の崩壊をもたらしました。

- ・「ポリス（都市国家）こそが善き生（エウダイモニア）である」という共同体信仰

- ・ホメロスに描かれるような、名誉・勇気・栄光を重んじる英雄倫理
- ・神々の秩序に守られた宗教的世界観
- ・民主政への絶対的信頼

これらがことごとく揺らぎ、人々は「何を信じて生きてよいかわからない」という状態に陥ったのです。

そのなかで、"外の制度" や "社会秩序" ではなく、"自分の内なる魂" にこそ拠る所があるのではないか——そう考えたのが、ソクラテスでした。

「無知の知」と対話の芸術

ソクラテスは自らを「何も知らない者」と位置づけました。それは謙遜の姿勢ではなく、"知っていると思い込んでいること"こそが危ういという哲学的認識でした。

アテナイの市場（アゴラ）に立ち、市民や政治家、職人、若者らに問いを投げかけます。

「正義とは何か？」

「善く生きるとはどういうことか？」

「美しさとは？」

答えた者が最初は自信満々でも、問いを重ねるうちに言葉に詰まってしまう——それによって、彼らは自分の "思い込み" に気づきます。これが有名な「無知の知（私は自分が無知であると知っている）」です。

この姿勢は、現代にも強い示唆を与えます。

情報が氾濫するいま、知っている "つもり" になっていないか？ 本当に大切な問いから、逃げてはいないか？

ソクラテス裁判：魂を守るか、命を守るか

晩年、ソクラテスは次の二つの罪で告発されます。

1. ポリスの神々を信じていない（神を冒瀆した罪）
—— 国家が信仰する伝統的な神々を信じず、「新しい神霊（ダイモーン）」を紹介して人々を惑わせたと言われました。
2. 青年を墮落させた（悪しき教育による罪）
—— 若者たちに既存の価値観や権威を疑わせ、伝統的秩序を破壊したとして批判されました。

この二つは、形式的には宗教冒瀆と教育的害悪に関する罪ですが、背景にはもっと深い政治的・社会的な事情がありました。ペロポネソス戦争後の混乱のなかで、旧来の価値観が揺らいでいたアテナイ社会において、青年たちに「ほんとうにそれでいいのか？」と既存の価値を問い直させるソクラテスの言動は、保守的な市民層にとって危険視されたのです。

有名な裁判で、彼は一切の妥協を拒み、「魂を正しく保つことが人間の義務である」と主張します。

「善く生きることは、ただ生きることよりも尊い」

死刑判決を受けた彼に、「罰金刑」や「国外追放」などの代替案を自ら提示する機会が与えられましたが、彼はあえてそれを拒否し、毒杯を仰いでその生涯を閉じます。

なぜ、命を惜しまなかったのか——。

彼にとって、もっとも大切だったのは「魂の正しさ」でした。どれほど理不尽に思える判決であっても、法を破ればそれは魂を裏切ることになる。だからこそ、自らの信念を貫いて死を受け入れたのです。

問いを発する者の運命

ソクラテスは「神々を冒瀆した」から死んだわけではありません。彼は「人々が信じてきたものに疑問を投げかけた」から死刑になったのです。

これは歴史に繰り返される構図です。イエス・キリストやガリレオ、さらには現代の内部告発者に至るまで、既存秩序に不都合な「問い」を発した者は、時として排除されます。

けれども、それこそが哲学の本質——問い続けること、沈黙に陥らないこと、良心に従って生きることなのかもしれません。彼の死は後世、多くの芸術や思想に影響を与え、キリスト教における「殉教者」との共通性も指摘されています。また、この態度には武士道的な精神性——「名誉」や「義」に生きる姿勢——を感じさせるという指摘もあります。

21 世紀に蘇るなら——ソクラテスは何を問うか

もしソクラテスが現代 21 世紀に再び登場したなら、彼は私たちにどんな問いを投げかけるのでしょうか？

おそらく、こう問うはずです：

- ・「あなたは、なぜその仕事をしているのか？」
- ・「あなたが "正しい" と思っていることの根拠は何か？」
- ・「あなたは、本当に "自由" に生きているのか？」
- ・「AI や SNS の時代、あなた自身の思考を持っているか？」

そして私たちが答えに詰まったとき、彼は静かにこう告げるかもしれません。

「答えを持つことなく、問いを持ち続けることが、哲学であり、人間である」

AI が文章を生み出し、SNS が感情を掻き立てる時代だからこそ、私たちは思考を止めがちです。「問う」ことの重み、「立ち止まる」ことの価値を、ソクラテスは今もなお静かに、しかし鋭く語りかけているのです。

ソクラテスが遺したもの

ソクラテス自身は一冊の書物も残しませんでした。私たちが彼について知るの、主に弟子プラトンの著作（『ソクラテスの弁明』『クリトン』『饗宴』など）や、クセノポンの記録によります。

また、彼を風刺的に描いたアリストファネスの喜劇『雲』のように、当時から賛否が分かれていたこともわかっています。

けれども——

「自分を知ること」

「問うことをやめないこと」

「魂の声に従って生きること」

これらのソクラテスの精神は、いまでも哲学の根幹であり、私たち一人ひとりが生きるための羅針盤でもあります。

[次回予告]

第 3 回：プラトン——見えない " 真の世界 " を求めて

ソクラテスの問いを受け継ぎながら、彼の弟子プラトンは「イデア」という不思議な概念を打ち立てました。現実の背後に " 真のリアリティ " がある——この逆転の発想が、なぜ 2000 年以上も人類を魅了してきたのか。その思想世界に迫ります。



人間学

実存心身医学のアプローチ

高島博 原著

金城英典・岡野三四郎・村松憲行 共訳

目次

1. 現代人間哲学
2. ユーモアの人間学
3. 意味への意志と生命の極限状況
4. 人間の心の活動
5. 機能次元
6. ログセラピーと実存心身医学
7. 心技体から四次元的人間像へのアプローチ
8. 精神・頭脳・コンピューター --- 人間・動物・コンピューター
9. 体質・気質と性格 ----- 先天的性格と後天的性格
10. 精神心理拮抗作用
11. 従病 --- 病気とともに生きること
12. 苦痛・障害・病気
13. 疲労
14. 病気以前 --- 病気でない病気
15. 「ログセラピー」応用の「心身医学」
16. 味の哲学・哲学の味

※書籍代 2,000 円（送料込） 購入ご希望の方は事務局まで

事務局からのお知らせ

日本人間学会公式 SNS 開設のお知らせ

このたび、学会創設 40 周年を機に、公式の Facebook および X (旧 Twitter) アカウントを開設いたしました。

今後、学会の活動報告や講座情報、会員の研究紹介などを、定期的に発信してまいります。

時代の変化に合わせて、より多くの方々に「人間学」の魅力をお伝えできるよう努めてまいります。ぜひフォローしていただき、最新情報をご覧ください。



公式ホームページ
<https://ningengakkai.or.jp/>

facebook

<https://www.facebook.com/JSHAningengakkai>



一般社団法人日本人間学会
 @JSHA2025

新規会員特典のご案内



当学会に一般会員としてご入会いただいた方には、人間学の入門書として定評のある『人間学とは何か』(菅野盾樹著)を贈呈いたします。一読すれば人間学の全体像を把握できる内容となっています。

本書は専門的な学術書の性格を帯びているため、独学では難しい面もあることを考慮し、ご入会月を含む 4 カ月間、当会の研究会員によるメールサポートをご利用いただけます。本書を読まれた感想をお送りいただければ、研究会員が丁寧に返信いたします(無料)。

※本サポートは既存会員の方もご利用可能です。ご希望の方はお気軽にお申し出ください。

- 新規入会者に人間学のテキストの贈呈
- 入会后 4 か月間 E メールによる人間学のサポート
- サポートは無料

◆ 編集後記 ◆

去る 10 月 21 日、自民党総裁・高市早苗氏が第 104 代内閣総理大臣に選出されました。日本で女性が参政権を得たのは 1945 年、翌年には初の女性議員 39 名が誕生したとのこと。それから実に 80 年の歳月を経て、ついに女性首相が誕生したことから、海外メディアでは、かつて英国で 11 年間政権を担った「鉄の女」マーガレット・サッチャー元首相を引き合いに出し、高市首相の今後の政権運営に注目しています。女性リーダーに対する期待がいかに大きいのか、その重圧を改めて感じさせられます。

戦後 80 年を迎えた今年、社会の価値観や時代の流れは大きく変化しつつあります。政治の世界のみならず、学問や文

化の領域にも人工知能(AI)の進展をはじめとする新たな時代のうねりが押し寄せています。

当学会は、この 10 月で創設 40 周年を迎えました。一人の医師の強い志の種は、40 年の風雪を経て、「人間とは何か」という根源的な問いを手放すことなく育まれてきました。変化の激しい現代だからこそ、私たちは、時代の要請を汲み取りながら、新たな学会の在り方を模索し、次の時代を切り拓く責務を担っているといえます。そのためにも、私たち一人ひとりが確固たる「自分軸」を持つことの重要性が一層高まっていると感じます。

(事務局 会報編集部)

一般社団法人 日本人間学会 会報 2025 年 秋号 No. 30

発行日 2025 年 11 月 1 日 発行人 瀧 順一郎

発行所 一般社団法人 日本人間学会 〒180-0022 東京都武蔵野市境 5-4-3-405

HP : <https://www.ningengakkai.or.jp> Email : office.ningengakkai@gmail.com

☎ 03-6820-2417